

巻 頭 言

多根総合病院 院長 丹 羽 英 記

新しい専門医制度も始まり、また2015年10月からは医療事故調査制度も始まりました。医師を取り巻く環境はだんだん厳しくなって来ております。そこで、従来の医師中心の医療から、近森先生がKHSコンベンションの特別講演で言われていたように、多職種による多数精鋭のチーム医療が今後の多根総合病院にも日本の医療にも必要とされる時代です。

厚労省と日本看護協会は特定看護師制度を始め、また米国におけるいわゆるNP(ナース・プラクティショナー)ナースが多根総合病院にも採用され、今後医師の負担を軽減させてくれる方向です。しかし、特にそういう資格を持たなくとも、それぞれの医療従事者がエキスパートとして、自分の意見をしっかりと持ち、責任を持って、チーム医療の一員として仕事をするのが一番の医療安全ではないでしょうか。

新病院から始まった、多根総合病院医学雑誌も今回で第5巻となります。大阪大学消化器外科学の教授であり、日本消化器外科学会の理事長も務めておられる森正樹先生からも「医学雑誌を発刊している多くの病院は公的病院で、私立病院は大変めずらしく、このように学術面にも力を入れておられることが、貴院のますますの発展を下支えしているものと、感銘を受けています。」と非常にありがたいお言葉も頂いております。これもすべて渡瀬副院長をはじめとする編集委員の方々の努力の賜物と感謝しております。特に5年目となった今回は過去最多の18編もの論文を投稿していただき、ありがとうございます。その中には私達が始めた日本短期滞在手術研究会から生まれ、これも渡瀬先生が委員長を務め、富永師長が副委員長を務める、DSコーディネーター認定委員会の第1回資格認定者4名の方の投稿も含まれます。初めて外部の方にも論文を投稿していただきましたが、この医学雑誌はもちろん医学中央雑誌刊行会(医中誌)でも検索できる公式なもので、立派な実績になるものです。

論文を書くというのは、学会発表の何倍もの努力を必要とし、さらに理研の論文不正事件以降、論文の剽窃行為に対するチェックが厳しくなり、投稿者も査読者もいっそう大変な努力をされたと思いますが、自らのおこなった業績を自らの言葉で論文に残すという作業は、必ず医学関係者にとって大きな財産になると思います。

きつこう会も昨年よりKHSヘルスケアシステムと名称が変わり、今後多根総合病院だけじゃなく、全施設での綿密な連携が重要となって来ます。医師だけじゃなくコメディカルの方々も誌面上で一堂に会するこの医学雑誌がさらに充実していくことを期待しています。